



### 地元の良さを感じ取れる機会

浜崎小学校 校長 菊池 正仁

前回、「野生動物の出没に備えて」というタイトルで、サルやイノシシの特性について書かせていただきました。その後、様子をうかがいながら学級で指導をしました。しばらく落ち着いてきたなと思っていたところ、九月の中旬に前回の目撃現場に近い爪木崎口信号機付近で、「一晩中サルが居座っていた」という連絡をいただきました。地域の方がわざわざ登校前の時刻に学校まで足を運んで教えてくださりました。登校前に確認しましたが、既にサルの姿はありませんでした。ですが保護者の方からの目撃情報もあり、その週は集団下校にしました。下校前に先回りして確認し、職員が子供たちに付いて下校しました。結局、サルに遭遇することはありませんでしたが、安全第一でどつた行動なので、結果的にはよかったですと安心しました。そこでの出来事です。低学年の子供たちを送っていったとき、その様子を肩かけた保護者の方が後を追って、車を出してくれて「乗って行ってください」と声をかけてくれました。また、サルの情報をお伺いしたところ、「あそこに立っていたのはそのためだったんですね。ありがとうございます。」と感謝の気持ちも伝えていただきました。疲れは吹き飛び、やってよかったと思える瞬間でした。このように地域の皆さまも見ていただけているのだという実感は、共に子供たちの安全を考えていただけているという安心感にもつながっていききました。本当にありがたいことだと思っています。

話は変わりますが、九月の二十一〜二十二日に六年生が修学旅行に行ってきました。今年は見学地を静岡市にして、静岡に関する施設をじっくりと見学してきました。弥生時代の登呂遺跡や徳川家康に関する江戸時代に加え、何億十億年前からの歴史を学べる地球環境史ミュージアムと広く静岡の歴史を学びました。さらに、科学館や匠宿で最新と伝統の技術を学ぶこともできました。静岡の歴史や文化のすばらしさを知る中で、改めて自分たちの住む下田の良さにも気付いていってほしいと思います。(十月には須崎区にも足を運んだり、授業に参加してお手伝いしたりする計画もしています。その様子は次号にて紹介させていただきます。)

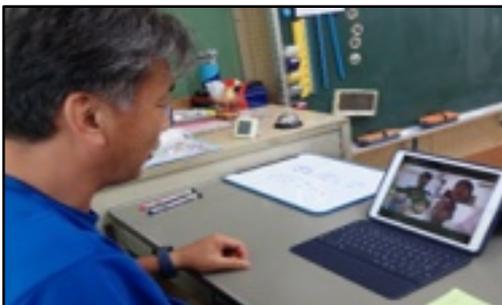
9/13 資源回収は中止になりましたが、学校に届けられたものを5・6年生が手伝ってくれました。



8/21・22 6年生 修学旅行 (静岡方面)



8/16 ZOOMの接続テスト。今後タブレットの活用を進めていきます。



その修学旅行で気づいたことがあります。それは子供たちの優しさです。みんなでいい修学旅行にしようという気持ちが伝わってきました。もう一つは、お土産選びです。限られたお小遣いの中で、家族へのお土産を楽しそうに考えていました。後口、子供たちに「お土産喜んでもらえた?」と聞くど皆嬉しそうに「はい!」と答えてくれました。子供のころからの思いやりの心が学校の安全を共に考える大人になる素地になっているのだなと思いました。

(9月の学校の様子)

### 須崎で見られる野鳥

18、モズ(百舌鳥)

丑嶋 久雄

「百舌鳥が枯れ木で鳴いている・・・。」という季節になってきました。モズは秋から冬にかけて「キチキチキチ」と鋭い大きな声で縄張りを主張します。これは「百舌鳥の高鳴き」として知られています。また、様々な鳥(百舌鳥)の鳴き声を真似た、複雑な囀りをすることが和名の由来となっているそうです。

日本ではほぼ全国で見られる留鳥ですが、東アジア地域に分布しています。身体全体はほぼ茶色ですが、オスには黒く太い過眼線があり、メスと区別できます。体長は20cmほど、ヒヨドリよりも小さいのですが、ずんぐりとした大きな頭部と、先端がかぎ状に曲がった強力なクチバシを持ち、バツヤやトカゲ、カエルのほかスズメやツグミ、ネズミなど自分と同じくらいの大さきの動物も襲います。強いクチバシと発達した首の筋肉で獲物を振り回し、絶命させます。そして、それらの獲物を枯れ枝などに串刺しにします。これを「百舌鳥のはやにえ」と言いますが、その意味は、縄張り説・貯蔵説など諸説あり、はっきりしたことはわかっておりません。

最近の研究では、「はやにえ」の消費が多かったオスほど繁殖期の歌の質が高まり、つがい相手を獲得しやすくなる事が明らかになったそうです。百舌鳥もいろいろ苦労してますね!!!

百舌鳥にはたくさんエピソードがありますが、二つ紹介します。

飲食や買い物で、仲間だけに金を出させて自分は負担しないことを「百舌勸定(もずかんじょう)」というそうですが、『百舌と鳩と鳴が買物をして代金の十五文を支払うときに、口のうまい百舌は鳩に八文、鳴に七文を支払わせて、自分は一銭も支払わずにすませた』という昔話から生まれました。



大阪府堺市に広がる世界遺産になった「百舌鳥古墳群」について「日本書紀」に逸話があります。その内容は、陵(お墓)建築中の現場に、突然シカが現れ作業員の目の前でそのまま死んでしまいました。それを不思議に思いシカの傷を調べるとシカの耳から百舌鳥が飛び出し飛んで行きました。その耳の中を見ると食いちぎられており、これ以降この地が百舌鳥耳原(モズノミミハラ)と呼ばれるようになったそうです。